

創立40周年記念号刊行の辞

経済学会運営委員長 森谷 英樹

敬愛大学経済学部が4年制大学として発足して40周年を迎えた。この間に経済学部は卒業生にして9,108名の諸兄・諸姉を社会に送り出してきた。卒業生たちはそれぞれ産業界、公務、教育、福祉など多様な分野において大活躍をしてきた。とくに地元千葉においては地域社会に数多く参画して独自の存在感を示してきた。まことに喜ばしいことである。

しかしながらこの10年間で大学をめぐる環境、大学のあり方や課題も大きく変わってきている。私見ではあるが環境の変動に対応して、敬愛大学も基本的な部分は残しつつも、変えるべきを変えることが、大学として生き残るための大事な課題となろう。生物が生き残るための条件は、強い者が必ず生き残るかという、必ずしもそうではないという。

最終的に競争で淘汰されずに種として生き残るのは、単に強いだけの種ではなくて、環境にうまく適応した種であると言われる。敬愛大学も生き残るために、現実の社会的なニーズに上手に適合すること、本質を失うことなく特色を持つことが引き続き肝要である。

30周年記念号（平成9年）が出た当時の敬愛大学の課題と適応はどうだったか。その後の10年間で大学の専門科目はどうなったか簡単に振り返ってみよう。当初はまだ伝統的な経済学部経済学科

の色が濃かった。だが平成10年ころから、経済学科という看板は変えずに、経済系・産業系という二つの科目群を持つという発想で科目の新設・再編が行われた。

産業系の専任教員も強化された。さらに実務経験がある経済人を数多く非常勤講師として迎えて生の経済・経営について指導をいただいている。経済学部経済学科の中に、経営的な科目を取り込むという流れはその後定着した。平成12年以降は全体を経済系・経営系というくくり方で提示、それが教員免許の取得と合わせて、敬愛大学経済学部の特徴となっている。

科目の新設等に伴って多くの若い教員が採用された。その結果研究活動は大いに活性化し、学内外における研究論文等の生産は増加した。平成17年度の研究論集と紀要における論文本数は22本であるがこれは平成7年度の9本に比べると2倍になっている。

経済学会は昭和41年に設立されて以来、研究論集の発行は本号で70号を数える。これからも経済学会員による実のある研究が続くことを期待したい。